Mind The World

渕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｉｎｄ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】
Ｎ０９８８Ｄ

【作者名】
渕

【あらすじ】
いつも通りの暮らしを満喫していた昴。彼女もでき、さらに楽しくなって行くかと思った学校生活……。しかし、修学旅行に行くバスが交通事故に遭う。そして昴達は精神世界へ迷い込む……

第一夢

夢を見た…

真っ黒な世界。

まだ作り上げられていない世界。

そして、俺らがこの世界を作っていく…夢……。

第二夢

ジリリリ……

ガチッ！

「ふぁぁぁあ……」

いつも通りの朝

目覚ましで目を覚まし、制服に着替えて自分で作る朝飯を食べる

そして歯を磨き、靴を履いて、家を出る

何も変わらないいつもの流れ

ドンッ！

「お～～っすううう！」

いきなり背中を押してきたこいつの名前は　園崎尋（そのざきじん）

ぞくに言う腐れ縁ってやつだ…と思う

「最近益々叩く勢いが強くなってきていると思うのは俺だけか？」

「そう、お前だけぇ～」

小馬鹿にしたように言う

「なら一つ…それに伴う制裁をしてやらねばならんな」

「おぉ～っと！待った待った！これ以上強くやらないんでお許しを！」

半笑いしながら謝ってくる

これもいつもの流れ

そして学校に着く

「ほ～ぅ、それでその醜い顔が更に醜くなったわけか」

「今日はちょっとイラッてきたからね」

尋の顔が醜くなったことを簡単に受け入れたこいつは　近江谷飛鳥（おおみやあすか）

頭は良いが、いきなり変なことをやり出す少し変わり者

結構モテる

「それはいいんだが…いい加減この耳障りなノイズをどうにかしてくれ」

さっきから教室の隅っこですすり泣きしている尋を駆除してくれと飛鳥が頼んでくる

「これ以上やると再起不能になりかねんぞ？」

「僕の知ったことじゃない」

「それもそうだな」

俺は教室から尋を廊下に放り投げる

と、同時にこのクラスの担任がやってきた

それを認識した教室にいた生徒たちが自分の席に着き始める

俺も一番後ろの席に座る

ふと気付きくと、尋がいつの間にか一番前の一番窓側の席に座っていた

あえて気にしないでおこう…

退屈な授業を隣に座っている飛鳥とトランプしながら難なく過ごす

昼休み

俺と尋と飛鳥でいつものように窓側に机を寄せ、食べる

そしていつものように飛鳥に弁当を作ってくる人たちを俺と尋が横目で睨む

「なぁ…尋」

「あぁ、言うな…言いたいことは痛いほど解るから……」

「そうだな…言うまでもないか…」

昼休みもそろそろ終わると言う時に俺へまさかのお呼び出しがあった

「裏切りやがって……」

「やっと君にも春が来たか」

後ろから聞こえてくる声を無視してさっきクラスメイトが俺への伝言を届けに来たのでその伝言とやらに従う

昼休み終了5分前に屋上の入り口前で待っています

か…

階段を登ると、そこには可愛らしい女子が立っていた

「なんか用？」

ビクッ！っと俺を待っていたらしい女子が体を震わせる

「えええええぇ～っと！……昴くん…ですよね？」

「そうだけど…？」

あ、俺を自己紹介すんの忘れてた

俺の名前は　春日昴（かすがすばる）

これでオッケー

「こ、ここに、よ…呼んだのはですねっ！」

「前置きはいいから落ち着こうか？」

笑いながら話しかける

「すすすみません！あ…あれ！？何言おうとしたんだっけ！？」

この子は天然ということを一瞬で察知したのは言うまでもない

「昴くん…今彼女さんとかいます…か…？」

「ん？今は居ないけど」

「……よかった……」

小さい声で聞こえなかった

「今なんか言った？」

「あ！いいえ何でも！」

「そかそか、それで用ってのは？」

「単刀直入に言いますっ！私と付き合ってくれたりしませんか！？」

まぁまさかとは思ってたけどここまで普通に言われると……

「俺なんかでよければどうぞ？」

少し照れているとこを隠しながら言う

「ホントですかっ！？」

よほど嬉しかったのだろう

小さくジャンプしながら言ってきた

「二度も言わせないでくれよ…恥ずかしいから…」

やはり照れ隠しは出来なかった

「あ、そういや名前……」

「そうだった！私の名前は　沖野比奈（おきのひな）です！」

こうして俺、春日昴と沖野比奈は付き合うことになった

これから何があるとも知らずに……

第三夢

比奈と付き合いだして早、3週間が経とうとしていた

お互いを下の名前で呼び合うような仲にもなった

そして明日は待ちに待った修学旅行だ

教室ではその話題で盛り上がっていた

「なぁ昴～」

不意に尋が話しかけてきた

「あんた比奈ちゃんとこの自由時間過ごすんだべ？」

「その予定だな」

「飛鳥もまた俺らの知らない女と回るとか言ってるしなぁ～」

「らしいな～」

「で、だっ！俺もお前た…」

「拒否」

尋が全て言い終わる前に即答する

すると『昴ちゃんのばかぁ～！』と叫びながら何処かに走り去って行った

そして修学旅行当日

「やはりスコップは持っていくべきだろ」
「なんでスコップが修学旅行に必要なんだよ！？」
「スコップは使う者によって真の効果を発揮するんだぞ」
「まじか！？ちょっとまだ集合時間まで時間あるよな！？俺買ってくる！」

なぁ～に話してるのか…

そして尋がスコップを買ってきた時にはバスが発進する寸前だったのはご想像出来ただろう

「す～ば～るくんっ！」
「ぬぉ！？」

飛鳥達とトランプしているところ、背後から不意に比奈が抱きついてきた

「飛鳥君と……まぁいいや、昴くん借りてもいい？」
尋…どんまい…

俺は比奈に手を引かれながら後ろを振り返ると尋が頭を抱えていた

そんな落ち込むなって……

俺と比奈が付き合ったことは何故かすぐクラス中に広まっていた

原因は尋だろうけどな

そして俺は比奈の隣の座席に座っているのだが……

「ねぇ春日くん、あなたの番よ？」
「早く引いてくれよぉ～」

飛鳥達とのトランプから拉致られた俺は、また比奈と愉快な仲間達とトランプする羽目になった

「まぁ待て、焦るんじゃない」

そしてたちが悪いことに、こっちのトランプは罰ゲームが在るという……

負けられないな

そんなこんなで、５戦０勝４敗というもの凄い結果を出してトランプは幕を閉じた…

俺の顔が……

罰ゲームの内容はご想像にお任せします……

そしてふと、外を見るとそこは凄い景色になっていた

簡単に言うと、いろは坂から見た景色に近い

俺は自分の鞄の中にインスタントカメラがあることを思い出し、比奈に了解を得て自分の席に戻った

そして……

俺はカメラのレンズ越しに見たものは……

不適に嘲笑う奇妙なピエロだった……

それに驚いてレンズから目を離すとほぼ同時に、バスが大きく揺れた

俺の耳にはクラスメイト達の悲鳴なんか届いていなかった

それ以前に何故バスがこんなに揺れているのも気にならなかった

俺の思考回路にあるのは、さっき見た奇妙なピエロのことだけだった…

「お前……誰だよ……？」

この言葉が全て言い切れていたのか解らない

そして俺の思考回路は、シャットダウンされた……

第四夢

体が軽い……

もはや体など無いかのように……

気が付くとそこは真っ白な場所

辺りを見渡しても真っ白

色が付いてるのは俺だけだった

無意識のまま俺は歩いていた

方向感覚もなくなっている

今歩いている方向が東西南北、それ以前に上なのか下なのかすら解らない

そっか……

これは夢だな…

そう思いこもうとした時…

「ゴノゼガイヲ創造ズルモノ……

汝ニゾノヂカラハアルカ…？」

何処からか聞こえる霞んだ声……

「誰かいんのか！？」

俺の問いを無視してその声は続ける……

「汝ニハゾノ勇気ガアルカ……？
恐レハアルカ……？
守リタイ者ガアルカ……？」

「なんのこと言ってるかサッパリ解んねー…」

「汝ニゾノ守ルヂカラト、創造スルヂカラヲ与エヨウ……」

「は？何で俺なわけ？！それ以前に俺の話を聞いて貰いたいんだけどな！」

「……」

「シカトかぃ…」

そして溜息を吐いたその瞬間、俺はあることに気付いた

「あれ？…さっきまでここにこんなんあったっけ？」

俺の目に映るのは小さな箱

「さっきの声といい、この箱といい……意味がわからん夢だな」

そう言いながら箱の目の前にしゃがむ

「開けちゃっていいのかな？」

俺にしては珍しく興味が沸いた

箱を手に取ってみる

「軽いな」

箱を手にしながらいろんな角度からその箱を見る

「えぇ……っと〜…」

開ける場所がない……

と思った直後、小さな穴を見付けた

覗いてみるが、その中も真っ白だった

「気味悪っ！」

そんなことを言いながらも興味津々な俺

「指入れちゃえ♪」

そう言って人差し指を穴に入れた瞬間……

始まってしまった……

このゲームのスタートが……

第四夢（後書き）

少し忙しい日々が続いているので一週間に一度の更新という感じで書いていきます。

気長に待ちながら読んでくれれば幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0988d/

Mind The World

2010年10月17日05時00分発行